



Title	VIII. 実践日本語教育
Author(s)	山下, 好孝
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 90-97
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59652
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_10.pdf



VIII. 実践日本語教育

山 下 好 孝

2014年4月期に多文化交流科目の一つとして、「実践日本語教育」という科目を開講した。これは新渡戸カレッジの学生と外国人留学生を対象とした講義である。

1. 目的、目標

本講義は以下のことを主な目的としている。

- 1) 新渡戸カレッジの学生が将来海外で外国人学生と交流すること。
- 2) その際に、日本語の説明ができること。
- 3) 外国人日本語学習者に日本語を説明することで、自分たちの母語を見直すこと。

また外国人留学生に関しては

- 1) 日本人学生と共に学び、お互いの視点を理解すること。
- 2) 学習者として学んだ日本語を今度は教える側の視点から見直すこと。
- 3) 日本語と自分の母語を見直すことで、母語の理解を促進すること。

2. 開講時間、受講生数

上記の目的をもって、金曜日の五時間目（午後4時半～6時）に開講したが、それにはひとつの狙いがあった。

毎週、火曜日と金曜日の夕方、私が主宰する「日本語イブニングコース」というのが開講されている。このコースはボランティアの北海道大学の学生や市民が講師となって、北海道大学の留学生およびその家族に日本語を教えるものである。「実践日本語教育」では主に日本語教育の指導法を説明するが、実際に教える場面を見学したり経験したりしなければ、実践したことにはならない。本講義の受講生は本講義受講の後、日本語イブニングコースに参加することで、実際に教える場面を目にすることができた。

当初、本講義には日本人学生10名、外国人学生7名の登録があった。外国人学生の中にも日本語教育や日本語学に興味があるものがいて、上述の日本語イブニングコースに参加したのもいた。

3. 授業の流れ、内容

3.1 小テスト

日本語教育の実際を学ぶために、毎回講義の冒頭で音声の小テストを行った。主に、単語のアクセントに関することだが、日本語ネイティブの学生にとっても説明を受けなければ回答するのが難しかった。毎週、テキストを一課ずつ進んだが、そのテキストに現れる語彙を試験範囲に含めた。名詞の場合は単独で発音した時のアクセントを、動詞や形容詞の場合は、それぞれの変化形（否定形、過去形）などに変換した時のアクセントを出題した。これらにはルールが存在するが、明示的に学んだ学生はほとんどいなかった。しかし、この小テストを繰り返すことで、アクセントに知覚や日本語の音声そのものに対する意識が高まったと言える。

3.2 テキストの説明

本講義のテキストとして『みんなの日本語初級Ⅰ、第2版』（スリーエーネットワーク）を採用した。このテキストは国内外で広く使われている。講義が15週しか開講されないため、本来なら初級Ⅰ、Ⅱのすべてをカバーしたかったのだが、半分だけで終わってしまった。しかしその中でも日本語教育の本質に関わる助詞の用法や、いわゆる「テ形」の形成や使用が含まれている。これらの知識抜きには日本語を教えることはできない。

講義はまず担当者である私が各課のポイントを説明した。しかしながら、入門レベルのテキストである本書にも初心者にはわかりにくい文型もときどき掲載されている。

たとえば第3課では場所の言い方に関する文型がポイントとなっている。次の例文は地図を見ながら発話するものである。

1) アメリカはどこですか。

この程度の文なら学習者は簡単に理解し、教えるのも容易だ。しかし、以下の文はどうだろうか。

2) 佐藤さんはどこですか。

これは一見すると1)の例文と同じ文型に見える。しかし文に次のような操作を加えると違いが見えてくる。

3) どこがアメリカですか。

これは1)を主語、述語を反転させた文である。これは地図を見せながら発話するのは可能だが、2)に同様の操作を加えてると、不自然な文になる。

4) ?どこが佐藤さんですか。

2)のような文は「うなぎ文」と呼ばれ、もともとはもっと長い文が省略されたものと考えられている。概ね、次のような文の短縮されたものと理解される。

5) 佐藤さんはどこにいますか。

「うなぎ文」では通常、主語と述語の反転はできない。このような事柄は、日本語教育の初級者にも、中級程度の日本語学習者にも見逃されがちな項目である。そして、日本語初級の教育においては明示的に説明しなくとも、教える側は知っておかなければならないものである。

さらに日本語母語話者なら簡単にできることで、学習者に説明するが困難な項目もある。たとえば動詞の否定形(ナイ形)、過去形(タ形)などである。これらは動詞の分類(「五段動詞」「一段動詞」「変格動詞」)から始めなければ説明することはできない。ネイティブスピーカーの直観では運用はできるが、説明は難しい項目にかんしては、詳しく解説した。

3.3 口頭練習

各課ごとに最初にポイントを説明して、その後で練習問題を講義の中で模擬的に行わせた。『みんなの日本語』の練習部分は基本的には会話練習で成り立っている。会話の中で「置き換え」や「変換」をしながら文法を

学ぶスタイルをとっている。本講義でも、基本的には日本人学生が講師役、外国人学生が生徒役で練習を行った。外国人学生数が少なかったこともあり、時には日本人同士をペアにしたこともある。

『みんなの日本語』は基本的に文型積み上げ型の教材であるため、音声の説明は本の最初の部分だけに集められており、第1課以降は語彙や文法項目の習得が中心課題になる。しかし、ペアで練習を口頭で行わせると、外国人学習者の不自然な発音、日本人同士でも方言の違いによるアクセントの異同等が、自然に耳に入ってくる。その段階で、受講生たちは文法以外のことにも気をつけるようになっていた。

3.4 実習、見学

講義の中で説明、模擬練習を行うだけではなく、受講生は上述の「日本語イブニングコース」に参加し、実際に外国人留学生に日本語を指導する機会を得た。しかし、学生によっては同コースの時間帯にクラブ活動やアルバイトの予定を入れているものもいた。そのため実習の場を別に設けなければならなかった。

担当者である私は留学生センターの業務として、「日本語研修コース（集中日本語コース）」というのも担当していた。そこで、そのコースの私の担当する時間帯に見学の機会を設け、「日本語イブニングコース」に参加できない学生、および希望の学生に実際の授業を見学させた。もちろん、その見学の中でも、外国人学習者とペアをくませ、口頭練習に参加してもらった。

さらに、「日本語研修コース」の補講の時間も実践の場として利用した。「日本語研修コース」は毎日午前8時45分から午後2時半まで授業が組み込まれている。全16週間で初級の日本語（文法、会話、作文、読解、発音・聴解の各科目）を履修するため、かなりのスピードで進む。そのため、受講生の中には授業についていけず、補講が必要になるものがかかなりの確率で現れる。2014年度春学期は、早い時期から補講の時間を設けた。毎日午後2時45分から3時45分の時間帯に、担当者である私やボランティアの方の協力のもと、復習を中心に補講を行った。その場に「実践日本語教育」の受講生も参加した。「日本語研修コース」も同じ『みんなの日本語』をテキストとして使用していたためコース前半は受講生の持つ同じテキストを使って補講を手伝ってもらった。最初は見学で、後には担当者や経験の豊

かなボランティアの人の見守る中で、指定した課を担当してもらった。後半になるとテキストの2冊目を使用するため、見学者、実習者には担当者が所有するテキストを貸し出し、対処した。

これらの実践の場を通じて、実際に初級の外国人学習者と接することができたのは、受講生にとって貴重な経験になった。受講者の外国人学生の何人かも同様に授業を行っている。

4. 評価方法

本講義では試験は行わず、受講生の各自が行った授業もしくは見学のレポートを提出させた。一人最低4回の授業または見学を義務付け、それに関して以下の項目を報告させた。

- 1) 授業対象者
- 2) 主な指導の内容(3点)
- 3) うまくできた点、良かったと思う点
- 4) うまくできなかった点、疑問に思った点

これらの項目に関し、学期末まで一人最低4本のレポートを提出させた。レポートには所定の様式があり、これを電子メールに添付するものも、プリントアウトして内容を手書きで書き入れて提出するものもいた。

5. 学生の反応

今回受講した日本人学生の場合は、概ねこちらの意図どおりの実践を行った。しかし外国人学生の場合は、日本語を教えることにためらいがあり、困難を感じていたことから、自分の母語(英語、中国語等)を日本人を対象に教え、それをレポートにまとめることも許可した。ある英語母語話者の学生は、本講義の受講生の何人かを生徒にし、会話の授業を行い、それに基づきレポートを書いたものもいる。

6. 達成できた点

語学教育は実際の授業だけでなく、それ以前の教材の準備や教案の作成も重要である。講義参加者の中には詳細な教材を作成したものもいるが、中にはほとんど手ぶらで授業に望んだものもいた。最初は甘く見ていた学

生も、2回めからはこれでは通用しないと実感し、工夫を凝らすようになった。

英語の流暢な学生は、英語でなんでも説明してしまい、肝心の日本語の練習が疎かになっていたものもいる。しかしこのようなことは経験を積んでいかないとなかなか解消できない。15週間という短期間で実習、見学を4回以上課したことはよかったと思われる。

7. 今後の課題

本講義は日本人学生には概ね好評であった。しかし外国人学生の場合、途中で辞めたものが何人かいる。おそらく、自分にはあまりプラスになるものがないと感じたのであろう。日本にいる外国人留学生の場合、このような「多文化交流」の講義を設けなくても、日本人と交流する機会は多くある。やはり講義の内容が自分にプラスになるものがなければ受講する意義を見い出せないのだと思う。

本講義は、実際に学んだことを実践する場（「日本語イブニングコース」「日本語研修コース補講」）などがあったため、こちらの意図が達成できたと思う。しかし「日本語イブニングコース」は国際本部の改修工事などの影響で、2014年秋からは開講されないことになった。実際に日本語教育を実践する場を確保することが重要である。

「はじめに」の部分でも述べたが、新渡戸カレッジに所属する学生が将来海外で日本語を教える機会があると想定してこの講義をデザインした。逆に言うと、日本語を教えることを目的に、新渡戸カレッジの学生を海外に派遣することを企画してもいいのではないだろうか。これには新渡戸カレッジに関わる事務サイドの協力が不可欠である。

最後に学生たちの感想を引用しておく。

- ・ 教員による指示が適切であり、聞き取りやすく、授業に対する意欲を促すものであった。
- ・ 外国人と共に授業を受けることは初めてだったが、様々な意見が聞くことができて非常に興味深いものだった。
- ・ 日本語について海外の人の目線から考えることができたこと。北海道弁

が発見できたこと。

- ・おもしろかったです。
- ・とても楽しい授業で、毎週来るのが楽しかった。
- ・日本人と外国人留学生と一緒に勉強すること。
- ・留学生がもっといたらいいなと思います。
- ・もっと多くの多文化交流科目の授業があればいいと思います。
- ・日本語を母語としない人とのコミュニケーションの難しさを実感した。
本当に言葉が通じないという状況を体験できてよかった。
- ・この授業は日本語の発音にとっても役に立ちました。
- ・母語話者との考え方の違いを知ることが出来た。何がむずかしいかを知ることが出来てよかった。
- ・日本語は考えていた以上にむずかしかった。
- ・教えるということはとてもたいへんだし、1回の授業に対する準備がとても多いけど、学生が「わかった!」とってくれたときのよろこびはとても大きいものであった。
- ・日本人として、日本語の文法を考えるのがとても難しかった。
- ・日本語を学び・習得に来ている留学生もいる中で、日本語を使わず、自由には使えない英語を用いたり、ジェスチャーを用いて必死にコミュニケーションを図った。身体全てを使ったコミュニケーションが大切だと思った。
- ・授業の中で、自分が考えたこともないような疑問があり、困難であることを知って勉強になった。
- ・改めて母語を知ることができた。そして、日常で気づかないことを教えるとなると難しいことを知った。
- ・自国の文化や言葉について客観的に考察することができた。
- ・めずらしい授業で、先生も生徒もやさしくて、本当に勉強になりました。
山下先生、ありがとうございました。
- ・留学生とともに学ぶことで、自分の意見をよりわかりやすく伝えるという気持ちがより強くなった。
- ・本授業では、日本語を実践的に教えることに重きが置かれていたためどうしても留学生受講者が、ネイティブの日本人に遠慮してしまう場面が多かった。留学生が過去に日本語を体系的に学んだ経験が多く語られていたら、日本語教育に初めて接する日本人学生へのよい刺激となった

だろう。外国人留学生の遠慮を解すホスピタリティーに思いを馳せた経験が少ない、若い日本人学生は留学生とともに学ぶ機会を持つほか、多国籍な環境下で場を和らげてコミュニケーションを円滑にするためのノウハウを習得する必要がある。そしてそのノウハウは、本授業で日本語クラス実践を重ねたことで着実に身についた。

やました よしたか（留学生センター教授）